

アルバイト経験はキャリア意識の形成に どのような影響を与えるのか (2)

— アルバイトの位置づけに関する検討 —

杉 山 成

青年期のキャリア意識の形成に影響を与える要因はいくつか想定されるが、なかでもアルバイトの経験は他の経験とは次の点で異なる意味を持つ。

一つは、多くの青年にとって、それが利益追求をめざした公式集団への最初の関与であるということである。アルバイトとはいえ職場である以上、ゼミナールやサークルといった学習・趣味を目的とした集団とは異なり、組織の利益追求が集団の目標として明示される。組織の一員として責任の自覚が要求されることも多い。また、アルバイトの場においては、年齢や価値観の異なった他者との対人関係が形成されやすく、これらは青年の生活空間の拡大と、職業に纏わるルールの社会化に大きく関与することが推測される。もう一点は、一般的に直接経験は間接経験に比して、より大きく自己効力 (self-efficacy) を規定することである。自己効力の情報源には、観察学習や他者からの言語的説得、情動的喚起などが指摘されているが、もっとも強力なものは、直接経験によって成功を経験し達成感を持つということとされている(坂野, 2002)。この点を考慮すると、進路に対する自己効力は、大学におけるキャリア教育等の間接経験よりも、アルバイト経験のような直接経験と密接な関わりを持つことが予測される。

前報告(杉山, 2007)においては、こうした観点のもとに、アルバイト経験とキャリア意識の関連についての検証を行った。キャリア意識としては「フリーター」という就業スタイルに対する考え方をとりあげ、アルバイトの経験がアルバイトで生活していくことへの自信を高め、結果的にフリーター生活への親和性を高めるという仮説を設定した。しかし、大学新生を対象に追跡調査を行った結果では、仮説に反して、アルバイトを経験した学生とそ

うでない学生との間にフリーター生活への肯定的—否定的態度に差は見出されなかった。

その原因としては、調査時点においてフリーターというライフスタイルが社会問題化して否定的にとらえられていたためにその社会的望ましきの要因が影響した可能性、および、大学生の従事するアルバイトにもいくつかの職種があるため、その職種によりキャリア意識に及ぼす影響が異なるという可能性が示唆された。さらに、影響過程に関しては生活空間におけるアルバイトの位置づけが仲介変数として機能している可能性が示唆された。すなわち、アルバイトの種類や期間がそのまま一律に影響を及ぼすのではなく、アルバイト経験を大学生生活のなかでどのように位置づけ、関わっているかということがキャリア意識に直接的に影響するということである。

本研究ではアルバイト経験がキャリア意識へ及ぼす影響を引き続き検証するが、前研究の結果とそれに対する考察を踏まえ、調査手続きや分析手法において次のような変更を施した。第一に、前研究では従属変数としてフリーター生活への態度を設定したが、本研究ではより広範なキャリア意識を検討対象とする。方法は前回と同様に4月と7月に縦断的調査を行い、アルバイト経験の有無がそれらに与える影響を検証する。第二の変更点は、生活空間におけるアルバイトの位置づけを新たな変数として設定したことである。アルバイト経験、キャリア意識との関連を検証することによって、この変数の仲介変数としての可能性を探ることとしたい。

方 法

調査手続き 2007年4月および7月の心理学（一般教育）の授業時間内において、受講者に対し質問紙を配布し、回答を求めた。

調査対象者 国立大学の1年生。4月に行った調査（以下、4月調査）では186名、7月に行った調査（以下、7月調査）では167名が参加した。

質問紙の構成 質問紙は、調査対象者の基本的属性（所属学科、年齢、性

別)、アルバイト経験に関する質問のほか、以下に示す各尺度の項目で構成された。

(1) 生活空間におけるアルバイトの位置づけに関する項目(4月調査, 7月調査で実施): 事前に大学生54名に対し「私にとってアルバイトとは」「現在のアルバイトに対して」という書き出しに続いて連想する内容を続けさせる文章完成法形式の予備調査を行った。得られた内容を分析したところ、アルバイトの目的, 生活のなかで占める割合, 選択理由, 将来の職業との関連性などの記述がみられたので, それに基づいて, 大学生のアルバイトに関する意識に焦点をあてた10項目を設定した。回答は「あてはまらない」から「あてはまる」までの5件法であり, 項目内容に基づいて, 生活空間におけるアルバイトの位置づけについて評価させた。

(2) キャリア意識に関する項目(7月調査のみ実施): 卒業後の職業について, ①希望業種(1.メーカー, 2.商社, 3.百貨店・ストア・専門店, 4.金融・証券・保険, 5.通信・マスメディア, 6.ソフトウェア・情報処理, 7.その他サービス, 8.その他, から一つ選択), ②希望職種(1.企画, 2.マーケティング, 3.販売, 4.総務, 5.経理・財務・会計, 6.広報・宣伝, 7.人事・労務, 8.未定, 9.その他, から一つ選択), ③希望職位(1.昇進したくない, 2.主任, 3.係長, 4.課長, 5.部長, 6.それ以上(役員等)から一つ選択), ④収入への欲求(高い収入を望める仕事がしたいと思いますか), ⑤業績貢献への欲求(組織の業績を伸ばす貢献がしたいと思いますか), ⑥仕事上の責任への欲求(責任ある重要な仕事がしたいと思いますか), ⑦能力発揮への欲求(自分の能力が発揮できる仕事がしたいと思いますか), ⑧昇進回避の欲求(責任や負担を負いたくないので出世したくないと思いますか)という8項目の質問を設定した¹。項目①から項目③は複数の選択肢からあてはまるものを一つ選ぶ形式である。他方, 項目④から⑧までは「まったくそ

¹ これらの項目の設定にあたっては比較のために時事通信社が2003年に行った調査「新しい働き方に関する調査」を参考にしている。

う思わない」から「非常にそう思う」までの 4 件法による評定である。以後、この 5 項目を「キャリア欲求」と呼ぶ。

(3) 就業動機尺度 (4 月調査, 7 月調査で実施): 安達 (1998) による 41 項目の尺度に対し, 5 件法による回答を求めた。これは「未入職者が未来の仕事状況に関連して持っている動機, または将来携わる職業的場面を想定した動機」として定義された就業動機を測定するものであり, 仕事にどのようなものを求めているかという面に焦点を当てている。因子分析により「探索志向」, 「対人志向」, 「上位志向」, 「挑戦志向」の 4 因子が確認されている。

結果の整理²

調査対象者のなかにはフルタイムの仕事に従事する社会人学生がいたが, 本研究の目的を考慮して以降の分析からは除外した。また, 大きな不備や欠損のある回答についても除外した結果, 4 月調査と 7 月調査の両方に回答した調査対象者は 145 名 (男子学生 92 名, 女子学生 53 名) となった³。

調査対象者のアルバイト経験 アルバイトの従事状況に関する質問によって調査対象者を TABLE. 1 のように「経験なし群 (アルバイトを経験したことがない)」「開始群 (4 月から 7 月の間に新たにアルバイトを開始した)」、 「継続群 (入学後にアルバイトを開始し, 現在も継続している)」「中断群 (入学前にアルバイトの経験があるが, 大学入学後は行っていない)」という 4 類型に分類した。大学入学以前にアルバイトを経験している学生が 15%, 大学入学後にアルバイトを開始した学生は 7 月時点で 54% ということになる。

従事しているアルバイトの具体的内容 (7 月調査) については, 回答を参照しながら 7 つのカテゴリに分類した結果, TABLE. 2 のようになった。検定の結果は有意であり ($\chi^2(6) = 14.48, p < .05$), 男子学生では飲食・接客

² 本研究の分析にあたっては, SPSS Statistic 17.0 を使用した。

³ 以降, アルバイトの位置づけの分析まではこの 145 名を分析対象とする。

TABLE. 1 アルバイト経験に関する4類型

タイプ名称	入学以前	4月時点	7月時点	男子学生	女子学生	全体
I 経験なし	×	×	×	32	13	45
II 開始	×	×	○	12	4	16
III 継続	×	○	○	34	28	62
IV 中断	○	×	×	14	8	22

注) ○印はその時点において就業中, ×印は就業していないことを示す

(31.0%)と学習塾講師(19.0%)が多いのに対し, 女子学生では飲食接客が半数以上(57.9%)を占めているのが特徴といえる。また, 現在従事しているアルバイトの継続期間は平均で約2.92カ月(SD 7.00), 週あたりの労働時間の平均は16.12時間(SD 13.6)であり, 男女差は有意ではなかった。

調査対象者のキャリア意識(7月調査) ①希望業種のカテゴリでは, 男女ともに金融(30.5%)やメーカー(20.6%)への希望が多く, 男女差は有意ではなかった。②希望職種のカテゴリでは男女差が有意で($\chi^2(6)=18.3$, $p<.05$), 「未定」とする回答を除いては, 男子学生では経理関係(25.6%)が多いが, 女子学生では特に多いものはなく, 企画(15.4%), 広報・宣伝(13.5%)などに分散していた。③希望職位については男女差が明確であり($\chi^2(5)=48.68$, $p<.001$), 男子学生では半数近く(45.7%)が役員以上の職を希望していたが, 女子学生では18.9%にとどまり, 課長職(30.2%)が最も多い回答であった。キャリア欲求の5項目については回答結果をそのまま

TABLE. 2 アルバイト経験の分類

業種	仕事内容	男子学生	女子学生	全体
飲食	接客	18	22	40
飲食	調理	6	1	7
教育	学習塾	11	0	11
教育	家庭教師	4	1	5
小売業	接客等	10	9	19
引越し補助	運搬等	6	3	9
その他		3	2	5

得点化し、平均値の検定を行った。男女差が有意であったのは、④高収入への欲求 ($t(141)=2.28, p<.05$) と⑧昇進回避への欲求 ($t(141)=3.94, p<.001$)であった。男子学生のほうが高い収入への欲求が高く、女子学生のほうが昇進を回避しようとする傾向が強いことが確認された。

就業動機尺度の41項目に対して因子分析を行ったところ、若干、属する項目に違いはみられたものの、安達(1998)の尺度構成時の因子とほぼ同様のものが確認された。そのため、4月調査・7月調査ともに、尺度構成時の方法に基づいて4つの下位尺度を構成した⁴。各下位尺度の平均値において男女差が見られたのは、4月調査の上位志向尺度 ($t(140)=3.52, p<.001$)、7月調査の上位志向尺度 ($t(143)=2.51, p<.05$)のみで、どちらも男子学生のほうが女子学生よりも高い傾向を示した。

アルバイト経験の有無とキャリア意識 アルバイトに従事することがキャリア意識にどのような影響を及ぼすのか検証するために、4種類のそれぞれにおけるキャリア意識の変化について集計を行った。2回の調査間の変化(被験者内要因)および4つの類型間の差(被験者間要因)を独立変数、就業動機の4つの下位尺度を従属変数とした二要因分散分析の結果、有意であったのは対人志向尺度における類型間の差のみであり ($F(3,138)=2.68, p<.05$)、TUKEY法による多重比較の結果、継続群の対人志向が経験なし群に比して高いことが確認された (FIGURE. 2)。

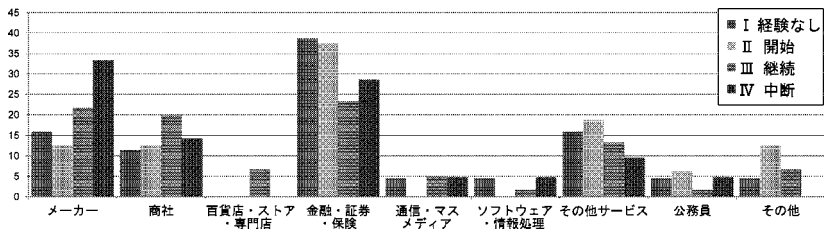


FIGURE. 1 アルバイト経験に関する4類型の希望業種分布 (%)

⁴ 各下位尺度の α 係数は.63 から.75 の値であった。

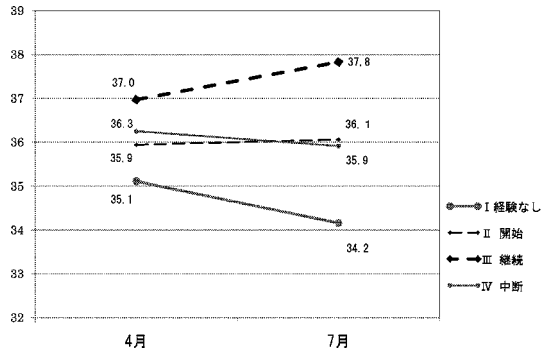


FIGURE. 2 4つの類型における就業動機（対人志向）の変化

7月調査の①希望業種，②希望職種，③希望職位の比較については χ^2 検定，キャリア欲求については一要因分散分析を行ったが，類型間に有意な差は確認されなかった（FIGURE. 2 および TABLE. 3）。

生活空間におけるアルバイトの位置づけとキャリア意識 次にアルバイトの位置づけの役割についての検証を行った⁵。予備調査によって構成した10項目に対し，主因子法による因子抽出を行い，固有値が1.0以上という基準に基づき因子数を2と決定した。そして，バリマックス回転を施したうえで，両因子に負荷量の低い項目を除くなど項目の精選を行い，最終的に TABLE. 4のような因子パターンが得られた⁶。

第一因子ではアルバイトへの積極的な取り組みといった内容，第二因子にはアルバイトを金銭的報酬だけではなく，社会勉強の機会としてとらえている内容を読み取ることができる。よって，それぞれ「アルバイトへの積極的関与」，「アルバイトの道具的認知」と命名し，因子名に沿う方向にそろえて

⁵ 以降はアルバイト経験に対する分析であるため，アルバイト経験のないI経験なし群は分析から除外している。

⁶ 項目4については両方の因子と関連があるが，因子負荷量と項目内容を考慮して，「アルバイトへの積極的関与」尺度の方に分類した。

TABLE. 3 アルバイト経験に関する4類型とキャリア意識

	I 経験なし	II 開始	III 継続	IV 中断	検定
キャリア意識 (7月)					
④ 高収入への欲求	3.21(0.60)	3.44(0.63)	3.48(0.62)	3.62(0.60)	$F(3,149)=1.34$ <i>n.s.</i>
⑤ 業績貢献への欲求	3.04(0.60)	3.19(0.65)	3.20(0.65)	3.14(0.73)	$F(3,149)=0.51$ <i>n.s.</i>
⑥ 高責任への欲求	2.67(0.67)	2.56(0.73)	2.74(0.87)	2.81(0.60)	$F(3,149)=0.39$ <i>n.s.</i>
⑦ 能力発揮への欲求	3.67(0.48)	3.44(0.63)	3.51(0.65)	3.62(0.60)	$F(3,149)=0.95$ <i>n.s.</i>
⑧ 昇進回避への欲求	1.96(0.64)	2.13(0.50)	2.02(0.79)	1.86(0.57)	$F(3,149)=0.54$ <i>n.s.</i>
就業動機 (4月)					
探索志向	43.52(6.79)	40.00(6.07)	41.46(7.19)	43.38(7.92)	$F(3,138)=1.44$ <i>n.s.</i>
対人志向	35.11(5.46)	35.93(5.72)	37.13(5.38)	36.25(6.89)	$F(3,138)=1.10$ <i>n.s.</i>
上位志向	31.51(5.66)	31.50(5.87)	32.50(5.44)	34.61(6.32)	$F(3,139)=1.56$ <i>n.s.</i>
挑戦志向	27.68(5.21)	27.50(2.98)	27.88(4.76)	29.95(3.53)	$F(3,139)=1.32$ <i>n.s.</i>
就業動機 (7月)					
探索志向	43.02(5.81)	39.75(7.60)	41.95(6.58)	43.18(7.66)	$F(3,139)=1.14$ <i>n.s.</i>
対人志向	34.16(5.80)	36.05(7.33)	37.54(5.38)	35.82(7.22)	$F(3,138)=2.68$ $p<.05$
上位志向	30.89(5.99)	31.12(5.30)	32.74(5.68)	32.55(6.25)	$F(3,136)=1.02$ <i>n.s.</i>
挑戦志向	27.78(3.90)	27.81(4.26)	28.80(3.99)	29.91(4.39)	$F(3,139)=1.62$ <i>n.s.</i>

得点を合計し、2つの下位尺度を構成した⁷。

アルバイト経験とこの尺度の関連を検証するために、アルバイト経験に基づく類型を独立変数、アルバイトの位置づけに関する2尺度を従属変数とする一要因分散分析を行ったところ、TABLE. 5に示すようにアルバイトへの積極的関与については5%水準で有意な主効果がみられた($F(2, 89) = 4.24$, $p < .05$)。TUKEY法による多重比較の結果、継続群の得点が中断群よりも高い傾向が確認された。他方、アルバイトの道具性認知では群間差は有意傾向であり($F(2, 89) = 2.38$, $p < .10$)、数値で見ると中断群の得点が他の2群よりも低い傾向がみられた。

アルバイトの位置づけ尺度とキャリア意識(7月調査)の関連の検証にあたっては、①希望職種、②希望職種、③希望職位ではアルバイト位置づけの

⁷ それぞれの α 係数は.58と.63であり、一般的な基準に比べるとやや低いが、項目の少なさを考慮して使用に足ると判断した。

TABLE. 4 アルバイトの位置づけに関する項目の因子パターン

項目	I	II	h^2
4. 現在のアルバイトが好きだ	.75	.47	.80
2. 現在のアルバイトに一生懸命とりにくんでいる	.70		.49
8. 現在のアルバイトから学んだものがたくさんある	.53		.31
10. 大学生活の中でアルバイトの占める割合は大きい	.37		.20
5. 現在のアルバイトをしているのは、社会勉強のためである		.58	.48
1. 現在のアルバイトの最大の目的は金銭的報酬である		-.51	.30
7. 他にいい仕事があれば、現在のアルバイトはすぐにでもやめたい		-.48	.54
寄与率 (%)	44.5	14.8	

(注) 因子負荷量は絶対値が.30以上のもののみ掲載してある

TABLE. 5 アルバイト従事に関する4類型とアルバイトの位置づけ

	II開始	III継続	IV中断	検定
アルバイトへの積極的関与	13.81(2.93)	15.35(2.86)	13.08(2.81)	$F(2,89)=4.24 p<.05$
アルバイトの道具的認知	8.56(2.06)	8.64(2.55)	7.00(1.85)	$F(2,89)=2.38 p<.10$

2尺度の高低を組み合わせた4類型⁸との対応を検討した。その結果、①希望職種においてのみ、 χ^2 検定の結果が有意傾向であり ($\chi^2(24)=34.67$, $p<.10$)、両方の尺度の高いHH群において、他群よりも金融関係を志望する傾向がみられた (FIGURE. 3)。また、キャリア欲求、就業動機との関連について相関分析を行った結果、アルバイトへの積極的関与と有意な関連があったのは、探索志向 ($r=.30$)、対人志向 ($r=.32$)、挑戦志向 ($r=.26$) であり、アルバイトの道具的認知とは、④高収入への欲求 ($r=-.25$)、探索志向 ($r=.26$)、対人志向 ($r=.26$)、挑戦志向 ($r=.28$) の各変数が有意な関連を示していた (TABLE. 6)。

⁸ 各下位尺度の高群・低群の分類は、それぞれの尺度の中央値に基づいて行われた。4群の人数は、両方の尺度が高いHH群が30人、アルバイトへの積極的関与が高くアルバイトの道具性認知が低いHL群が13人、積極的関与が低く道具性認知が高いLH群が13人、両方の尺度が低いLL群が34人であった。

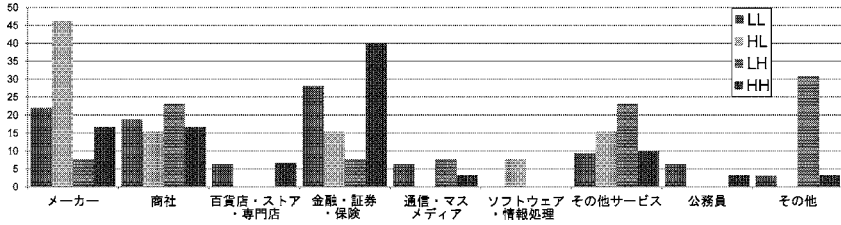


FIGURE. 3 アルバイト位置づけに関する4類型の希望業種分布 (%)

考察

本研究では大学1年生を調査対象として、彼らのキャリア意識の実態とその形成に及ぼすアルバイト経験の効果について調査を行った。

今回の調査対象者たちは週16時間程度アルバイトに従事しており、業務内容では飲食業における接客や家庭教師が多かった。希望業種としては金融やメーカーへの志望が多かった。こうした動向は社会科学系の単科大学としての調査対象大学の性質を反映したものと解釈される。

キャリア意識に関する性差は、希望業種にはみられなかった反面、希望職

TABLE. 6 アルバイトの位置づけとキャリア意識の相関

	アルバイトへの積極的関与	アルバイトの道具的認知
キャリア意識 (7月)		
④ 高収入への欲求	-.04	-.25*
⑤ 業績貢献への欲求	.20	.16
⑥ 高責任への欲求	.18	.13
⑦ 能力発揮への欲求	.10	.15
⑧ 昇進回避への欲求	.10	-.03
就業動機 (7月)		
探索志向	.30**	.26*
対人志向	.32**	.26*
上位志向	.05	-.05
挑戦志向	.26*	.28*

(注) * $p < .05$ ** $p < .01$

種や希望職位、高収入への欲求や昇進回避の欲求においては確認された。性差に関するこうした結果は、2002年度に同様の調査を行った杉山(2006)の結果とほぼ一致するが、業種における男女差がみられなかったことは異なっている。これはまだ就職難が伝えられていた2002年に比べ、調査を行った2007年時点では企業側の採用意欲が上昇しつつあると報道されていたため、女子学生においても男子学生と同水準の目標設定をしていたことを意味すると考えられる。その一方で、企業内での職種や職位の希望といった側面にみられる性差は、企業風土としての平等志向性に対して女子学生が持つ根強い不信や、女性の管理職が定着しているとはいえない現状への認識を反映しているものと解釈される。

次に、こうしたキャリア意識とアルバイト経験の関連についての検証を行った。アルバイト経験の4類型を比較した結果においては、就業動機の対人志向を除き、キャリア意識の明確な差異は確認されなかった。この結果は前報告(杉山, 2007)と共通するものであった。今回の調査においては、類型に属する人数に偏りが発生してしまったため、それが検定結果に影響した可能性もあるが、前報告の結果や、平等志向性がキャリア意識に及ぼす影響を検討した杉山(2006)の結果において平等志向性がキャリア意識の広範な領域に影響を及ぼしていたことをあわせて考慮すると、アルバイト経験それ自体がキャリア意識に及ぼす直接的影響は、他の関連要因に比してそれほど強いものとはいえないと判断できよう。就業動機の対人志向については、アルバイトをしなかった群では4月から7月にかけて低下する一方、アルバイトを継続している群では対照的に上昇する傾向を見せ、結果的に7月時点では有意な差が確認されている。ただ、FIGURE.2によれば、4月調査時点においても両群間には(有意ではないものの)差は存在しており、アルバイトの経験により対人志向が高まったというような直接的影響として解釈するよりも、アルバイトを開始し継続することの条件として対人志向の高低が関わると考えるほうが適切かもしれない。両群の対照的な傾向は興味深いものであり、アルバイト経験のなかで人と関わる仕事がしたいという傾向が維持さ

れる過程や、アルバイトを経験しない学生においてそれが低下する過程については、今後さらに検討を行う必要がある。

今回、新たに導入した生活空間におけるアルバイトの位置づけという観点については、因子分析によって導出されたアルバイトへの積極的関与とアルバイトの道具的認知がアルバイト経験と関連を持ち、さらに、キャリア意識のいくつかの側面に影響を及ぼしていることが確認された。結果が示唆するのは、アルバイトを継続するなかでアルバイトの位置づけが形成され、自身のキャリア意識の明確化につながるということであり、生活空間におけるアルバイトの位置づけという側面がアルバイトの経験とキャリア意識とを仲介しているという可能性を示すものであった。

このようにアルバイトが活動自体ではなくその位置づけが重要な意味を持つという結果は、アルバイトやその他の活動を捉える際に、個人の文脈をより考慮する必要があることを示唆している。たとえば、Little (1983) のパーソナル・プロジェクト (personal project) という概念は、環境心理学の分析単位として導入された概念で、「個人的な目標の達成を意図した一連の相互に関連した活動」と定義されている。澤田・井上・石井・山本 (1988) は、この概念に基づいて大学卒業後、職場環境に移行する過程を検討しているが、そのなかで活動内容が変化し、同じ活動であってもその位置づけが変化し、階層的に組織化されていくことが示されている。ここからはアルバイトという活動の意味づけがキャリア意識の発達とともに変化していくことが推測される。また、今回の研究では位置づけのなかでも目標達成との「道具性 (instrumentality)」の認知の重要性が示されたが、こうした側面は未来展望 (future time perspective) の形成や動機づけとの関連が指摘されている。たとえば、動機づけに関する期待理論 (Raynor, 1970) や EIV 理論 (Vroom, 1964) に基づいた杉山 (1994) の未来展望モデルは、将来目標と個々の活動が手段—目的の位置づけに基づいて階層的に結びつけられ、未来展望として機能することによって現在の活動を調整することを主張している (杉山, 1994, 杉山・神田, 1996)。

今後はこうした研究にみられるような個人的文脈に焦点をあてた理論展開を図り、アルバイト経験やキャリア教育の受講といったそれぞれの経験を、キャリア実現という目標に向けてどう位置づけていくのかという観点から検討し、キャリア意識の発達におけるそれぞれの果たす機能を明確にすることが重要である。そのことによって、たとえば、近年、アルバイトとの領域が不明確になりつつあると指摘されているキャリア教育としてのインターンシップとの目的・機能面での区別や、インターンシップの効果的な運営方法への示唆が得られることが期待されるからである。

引用文献

- 安達智子 1998 大学生の就業動機測定を試み 実験社会心理学研究, **38**, 172-182.
- 時事通信社 「新しい働き方に関する調査 (平成 12 年)」報告書 (<http://www.crs.or.jp/5133.htm>) 2009 年 1 月 10 日検索.
- Little, B. 1983 Personal projects: A rationale and method for investigation. *Environment and Behavior*, **15**, 273-309.
- 澤田英三・井上弥・石井眞治・山本多喜司 1988 大学卒業・就職に伴うパーソナル・プロジェクトの構造の微視発達に関する研究 広島大学教育学部紀要第一部, **37**, 171-180.
- 坂野雄二 2002 人間行動とセルフ・エフィカシー 坂野雄二・前田基成編「セルフ・エフィカシーの臨床心理学」北大路書房, pp. 2-22.
- 杉山成 1994 青年の未来展望と適応——期待理論によるアプローチ——立教大学心理学科研究年報, **37**, 65-76.
- 杉山成・神田信彦 1996 青年期における一般的統制感と時間的展望——アパシー傾向との関連性——教育心理学研究, **44**, 418-424.
- 杉山成 2006 キャリア意識の形成と平等志向性 小樽商科大学人文研究, **111**, 27-42.

- 杉山成 2007 アルバイト経験はキャリア意識の形成にどのような影響を与えるのか 小樽商科大学人文研究, **113**, 87-98.
- Raynor, J.O. 1970 Relationship between achievement-related motives, future orientation and academic performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, **15**, 28-33.
- Vroom, V.H. 1964 *Work and Motivation*. John Wiley and Sons. (坂下昭宣他訳 1982 「仕事とモチベーション」 白桃書房)